摂食障害における自尊心

八田 純子 [1]（hatta105@dpc.agu.ac.jp）
八田 武俊 [2]
〔[1] 愛知学院大学・[2] 岐阜医療科学大学〕

Investigation of the self-esteem in eating disorders

Junko Hatta [1], and Taketoshi Hatta [2]
[1] Department of Psychology, Aichi Gakuin University, Japan
[2] Department of Medical Technology, Gifu University of Medical Science, Japan

Abstract

The present study examined the characteristics of self-esteem in eating disorders (EDs) and those effects on EDs's behavior. We hypothesized first that a negative evaluation of self body shape and facial attractiveness relates to the decline of self-esteem, second that such decline of self-esteem relates to overall life satisfaction in EDs. In Study 1, the hypotheses were examined with ten normal women. The results showed that high tendency participants of ED scores tend to show negative evaluation of their self body shape and also on their self-esteem, whereas low self-esteem participants tended to show less life satisfaction. In Study 2, four ED patients and 13 normal women were compared. The results of ED patients showed higher negative evaluation of self body shape and facial attractiveness and these related to lower self-esteem as well as lower overall life satisfaction. On the other hand, normal women showed a negative correlation that the higher negative evaluation of own facial attractiveness, the lower self-esteem is. However, this relation between self-esteem and overall life satisfaction was weak. Those results suggest that the characteristics of the self-esteem of ED patients possess an exaggerated importance on the evaluation of own physical attractiveness and it relates to dissatisfaction overall their life.

Key words

eating disorders, self-esteem, physical attractiveness

1. はじめに

摂食行動の異常を主とした種々の症状を包括して摂食障害（Eating Disorders）という。一般的には「拒食症」や「過食症」として知られており、American Psychiatric Association（APA）の診断基準（DSM-Ⅳ-TR; APA, 2000）に従えば、それらは神経性無食欲症（Anorexia Nervosa）、神経性大食症（Bulimia Nervosa）に相当する。日本では、20年ほど前から一般の人々にも認知されるようになり、思春期から青年期の若い女性に発症しやすいことから（北村・藤本・井上, 1985）、青年期特有の心理や問題を反映していると考えられており、社会問題としても注目されてきた。そこで、本研究は、摂食障害患者の心理的な特徴を明らかにすることを目的とし、摂食障害患者と非臨床群の自尊心について検討する。

2. 研究１

これまで、摂食障害と自尊心の関係は多くの研究によって指摘されてきた（たとえば、Bruch, 1978; Button, Sonuga-Barke, Davies, & Thompson, 1996; Fairburn, Cooper, & Shafran, 2003）。自尊心とは、個人が全般的な自己の価値に対して行う判断を意味する（Rosenberg,1965）が、摂食障害患者の自尊心は、過度に体重や体型の知覚に偏重しており、そのことが摂食障害の中核的な病理であるとされている（Cooper & Fairburn, 1993）。体型以外にも、摂食障害患者の自尊心を支える外見要素として容貌が挙げられる。健全な人々の場合、体型や容貌以外に友人関係や自己のパーソナリティ、学業などが自尊心の基盤となるのに対して、摂食障害患者の場合、自尊心の基盤において体型や容貌の占める割合が非常に大きいことが指摘されている（Geller, Srikameswaran, Cokckell, & Zaitsoff, 2000)。また、Button, Loan, Davies, and Sonuga-Barke（1997）は、顔も含めた外見への不満が自己像全体への不満に結びつくことを指摘している。さらに、自尊心の基盤を体重・体型あるいは容貌などの外見に置くことは、過剰なダイエットや異常な食行動へと結びつきやすいことが示されている（Geller, Johnston, Madsen, Goldner, Remik, & Birmingham, 1998）。

これらのことから、異常な食行動が見られる摂食障害患者は自己の体型や容貌をネガティブに評価する傾向があり、自尊心は低いと考えられ、摂食障害患者の多くは低い自尊心を回復するためにダイエットに励むと推察される。しかし、摂食障害患者の外見に対する自己評価を検討した研究は少なく、とくに日本では、ほとんど見当たらない。また、こうした自尊心の構造は臨床だけではなく、摂食障害傾向が高い非臨床群においても同様であると思われる。そこで、本研究では、予備調査として、非臨床群（non-clinical or intact）を対象に研究１を行なった。また、大類と仁平（投稿中）は摂食障害傾向が高い人ほど、生活満足

度が低いことを示唆している。このことは摂食障害における体型や容貌に対する評価が食行動以外の行動にも反映されていることを意味しており、本研究においても、それらの評価や自尊心の低さが生活全般の満足度に及ぼす影響について検討する。これらのことから、摂食障害傾向が高い人ほど体型や容貌に対する満足度が低く、自尊心も低いため、生活満足感も低いと予想できる。

2.1 方法

本研究における対象者は、一般女子大学院生10名で、平均年齢は23.60歳であった。Geller et al.（2000）の研究方法に倣って、本研究ではEating Disorder Inventory（EDI: Garner, Olmstead, & Polivy, 1983; 永田, 切池, 松永, 池谷, 吉田, 山上（1994）による日本版）、Self-Esteem Scale（SES: Rosenberg, 1965）、容貌受容尺度（仁平, 2000）を含む質問紙調査を行なった。

EDIは摂食障害傾向の測定に用いられる尺度で8つの下位尺度を含んでいる。本研究では、摂食障害の診断基準と関連が強いとされる「やせ願望」（項目例；ダイエットのことを考えます、太ることがとても心配です）、「過食」（項目例；たくさん食べ物を食べて止められないと感じることがあります、隠れて食べたり飲んだりします）、「体型不満」（項目例；私のお腹は大きすぎると思います、足が太すぎると思います）の3つの下位尺度を用いた。SESは自尊心の測定に用いられる尺度で、10項目からなり、「強くそう思う：1点」から「まったくそう思わない：4点」の4段階で評定される。分析の際には、得点が高いほど自尊心が高くなるよう「強くそう思う：4点」から「まったくそう思わない：1点」に得点を変換した。容貌受容尺度は自己の容貌をどの程度受容しているかを測定するために、用いられる尺度で、全10項目からなる。各項目は「強くそう思う：1点」から「まったくそう思わない：4点」の4段階で評定される。分析の際には、得点が高いほど容貌の重要度が高くなるよう「強くそう思う：4点」から「まったくそう思わない：1点」に得点を変換した。

これらの尺度以外に、ネガティブな体型評価と容貌満足度、生活満足度が測定された。自己の体型の評価については、「1：非常にやせている」から「7：非常に太っている」の7段階で評定を求め、生活満足感については、自分の現在の生活にどの程度満足しているかを、100を最大として回答を求めた。

2.2 結果と考察

表1は各測度の平均値と標準偏差（SD）を、表2は各測度間の相関関係を示したものである。

表1：各項目の平均値と標準偏差

項　目	平均値 （SD）
自尊心	29.70（5.03）
容貌受容度	30.60（3.17）
ネガティブな体型評価	4.50（0.85）
生活満足度	63.00（23.12）
EDI; やせ願望	5.00 （5.16）
EDI; 体型不満	11.60（7.17）
EDI; 過食	3.10（3.54）

表2より、EDIの下位尺度であるやせ願望と体型不満は、ネガティブな体型評価と強い正の相関関係にあり、自尊心と負の相関関係にあることが示された。また、EDIにおける過食もネガティブな体型評価と正の相関関係にあった。ネガティブな体型評価は自尊心と強い負の相関関係にあることから、摂食障害傾向が高い人は体型をネガティブに評価しやすく、それによって自尊心が低下しやすいと解釈できる。さらに、自尊心と生活満足度に強い正の相関関係が示された。自尊心が低い人ほど生活全般に対する満足度は低いことから、おそらく摂食障害傾向が高い人は体型評価に偏重した自尊心の低下によって、生活全般に不満を抱きやすいと思われる。

一方、容貌受容度は自尊心と弱い正の相関関係にあった。このことは、摂食障害の自尊心において、容貌の比重が少ないことを示唆している。容貌受容度とネガティブな体型評価に負の相関関係が見られたことから、容貌の評価も摂食障害の自尊心とまったく無関係ではないと考えられ

表2：EDIの3尺度と各質問項目との相関

	自尊心	容貌受容度	ネガティブな体型評価	生活満足度	EDI; やせ願望	EDI; 過食
自尊心	–					
容貌受容度	.291	–				
ネガティブな体型評価	–.662	–.536	–			
生活満足度	.811**	.147	–.537	–		
EDI; やせ願望	–.496	–.292	.785**	–.568		
EDI; 過食	–.372	–.194	.498	–.018	.213	
EDI; 体型不満	–.530	–.365	.803**	–.595	.901**	.312

** p <.01, * p <.05

る。ただし、ネガティブな体型評価は自尊心と直接関係していたことから、摂食障害の自尊心への影響は、容貌よりも体型評価のほうが大きいと思われる。

ただ、これらの結果はあくまで非臨床群である一般女性を対象としたものである。また、摂食障害傾向が高い人が必ず摂食障害に陥るわけではないことから、臨床場面の摂食障害患者において、本研究の知見に適った自尊心が形成されているかは明らかでない。そこで、次の研究では臨床場面において摂食障害と診断された患者と非臨床群との比較を行なった。

3. 研究２

非臨床群女性を対象とした研究１では、体型評価と自尊心の直接的な関係がみられ、容貌と自尊心にはそのような関係がみられなかったことから、摂食障害における自尊心は体型評価によって強く規定される可能性が示唆された。そこで、研究２では、臨床場面においても同様の自尊心の構造が示されることを調べるため、摂食障害患者と健常者を対象に研究１と同様の調査を行なった。

3.1 方法

調査対象者は摂食障害患者４名（平均年齢22.8歳）と一般成人13名（22.1歳）であった。対象者はすべて女性で、一般成人群は大学生であった。質問紙はネガティブな体型評価と自尊心、容貌受容度、生活満足度に関する項目からなる。摂食障害患者は、いずれも医療機関においてDSM-Ⅳ-TR（APA, 2000）に沿って神経性無食欲症（Anorexia Nervosa）と診断され、通院・加療中であった。調査時点において他の精神疾患の合併は認められなかった。

3.2 結果と考察

各測度の平均値と標準偏差（SD）を表３に示す。自尊心や容貌受容度、ネガティブな体型評価、生活満足度の評定値について、Mann-WhitneyのU検定を行なったところ容貌受容度と生活満足度において群間差が有意であった（p <.05, p <.01）。容貌受容度と生活満足度に関して、摂食障害患者群の平均得点は非臨床群よりも低かった。

表３：各項目の平均値と標準偏差

項　目	摂食障害患者群	非臨床群
自尊心	21.25（7.63）	27.67（4.40）
容貌受容度	19.00（6.68）	27.73（3.80）
ネガティブな体型評	3.75（2.06）	4.53（0.74）
生活満足感	40.00（21.60）	70.20（11.52）

摂食障害群と一般成人群における自尊心の構造の違いを検討するため、群ごとに相関分析を行なった。表４は摂食障害群における自尊心、ネガティブな体型評価、容貌受容度の相関表である。摂食障害群において、自尊心はネガティブな体型評価と強い負の相関関係にあり、容貌受容度と強い正の相関関係にあった。これらのことは、摂食障害患者の自尊心が体型と容貌の両評価と強く結びついていることを示している。また、自尊心、ネガティブな体型評価、容貌満足度と生活満足度との相関係数は、摂食障害患者の外見評価や自尊心が生活全般に影響することを示唆している。

表４：摂食障害患者群における各項目間の相関

	自尊心	容貌受容度	ネガティブな体型評価
自尊心	−		
容貌受容度	.974*	−	
ネガティブな体型評価	−.948*	−.871	−
生活満足度	.667	.670	−.449

** p <.01, * p <.05

表５は一般成人群における自尊心、ネガティブな体型評価、容貌受容度の相関表である。一般成人群において、自尊心は容貌受容度と正の相関関係にあり、容貌受容度はネガティブな体型評価と負の相関関係にあった。他の項目間の相関関係は概ね弱かった。一般成人女性の自尊心と容貌受容度は強く関連するが、自尊心と体型評価の関連は弱いと思われる。

表５：一般成人群における各項目間の相関

	自尊心	容貌受容度	ネガティブな体型評価
自尊心	−		
容貌受容度	.608*	−	
ネガティブな体型評価	−.116	−.426	−
生活満足度	.255	.123	−.138

** p <.01, * p <.05

4. 総合考察

本論文では、ネガティブな体型評価と容貌が摂食障害患者の自尊心の低下を促し、生活全般に対して不満を感じさせると予想し、２つの調査を行なった。非臨床群女性を対象とした研究１では、摂食障害傾向が高い人は体型をネガティブに評価しやすく、自尊心が低下しやすいため、生活全般に不満を抱きやすいことが示唆された。さらに、体型をネガティブに評価する人ほど容貌の受容度は低かったが、容貌と自尊心の関係は弱かった。このことから、摂食障害傾向が高い人の自尊心は、相対的に体型評価と関連し、そうした自尊心は日常生活に対する満足感につながると解釈できる。非臨床群女性と摂食障害患者について検討した研究２では、摂食障害患者の自尊心は体型と容貌の両

評価に関連し、さらに生活全般に対する満足度に強く影響するのに対して、一般成人女性の自尊心は体型評価とほとんど関連がなく、容貌との関連が強かった。また、その自尊心は生活全般に対する満足感とほとんど関連しないことが示された。

研究 1 と 2 の結果から、摂食障害患者における自尊心の特徴はネガティブな体型評価や容貌といった外見評価が重視されやすいことであり、さらに、こうした自尊心が生活全般の満足度に影響する点であると考えられる。

McFarlane, McCabe, Jarry, Olmsted, and Polivy（2001）は、自尊心の低さを摂食障害の副次的な特徴であると論じている。本論文における結果は、摂食障害患者の認知パターンを説明する際、自尊心の低さは決定的な要因でないとしても、外見に対する自己評価と食行動を含めた生活全般への影響を媒介する要因であることを示唆している。それゆえ、本論文は摂食障害における自尊心の構造と機能を明らかにした点で有意義である。

ただし、本研究におけるサンプル数の少なさは否めない。特に研究 2 では対象者をひとつの病院に限定して抽出したため、摂食障害患者のサンプル数が 4 であった。病院を限定した理由は、摂食障害は他の精神疾患と並存している（comorbidity）割合が高いため（Herzog, Nursbaum, & Marmor, 1996）、医師や病院によって診断が変わることを懸念したからである。今後の課題は、サンプル数を増やしていくことと、外見評価や自尊心が摂食障害に及ぼす影響の大きさについて他の要因と比較検討することである。また、容貌と自尊心の関係が研究 1 よりも研究 2 の一般成人群において高かった理由として、回答者の属性の違いが挙げられる。研究2の対象者が学部学生であったのに対して、研究 1 の対象者は大学院生であったため、自尊心が容貌以外の要因、例えば研究業績などによって規定されていたと推察される。

引用文献

American Psychiatric Association. (2000). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (4th ed., text revision)*. Washington, DC and London, England: American Psychiatric Association.

Bruch, H. (1978). *The Golden Cage: The enigma of anorexia nervosa*. Harvard University Press. 岡部祥平,溝口純二(訳). (1979). 思春期やせ症の謎－ゴールデンケージー. 星和書店.

Button, E. J., Loan, P., Davies, J., & Sonuga-Barke, E. J. S. (1997). Self-esteem, eating problems and psychological well-being in a cohort of schoolgirls aged 15-16: A questionnaire and interview study. *International Journal of Eating Disorders*, 21, 39-47.

Button, E. J., Sonuga-Barke, E. J. S., Davies, J., & Thompson, M. (1996). A prospectivestudy of self-esteem in the prediction of eating problems in adolescent schoolgirls: Questionnaire findings. *British Journal of Clinical Psychology*, 35, 193-203.

Cooper, P. J., & Fairburn, C. G. (1993). Confusion over the core psychopathology of bulimia nervosa. *International Journal of Eating Disorders*, 13, 385-389.

Fairburn, C. G., Cooper, Z.,& Shafran, R. (2003). Cognitive behaviour therapy for eating disorders: A"transdiagnostic"theory and treatment. *Behaviour Research and Therapy*, 41, 509-528.

Garner, D. M., Olmstead, M. P., & Polivy, J. (1983). Development and validation of a multidimensional Eating Disorder Inventory for anorexia nervosa and bulimia. *International Journal of Eating Disorders*, 2, 15-34.

Geller, J., Johnston, C., Madsen, K., Goldner, E. M., Remik, R. A.,& Birmingham, C. L. (1998). Shape and weight based self-esteem and the eating disorders. *International Journal of Eating Disorders*, 24, 285-298.

Geller, J., Srikameswaran, S., Cokckell, S. J., & Zaitsoff, A. L. (2000). Assessment of Shape-and Weight-Based Self-Esteem in Adolescents. *International Journal of Eating Disorders*, 28, 339-345.

Herzog, D. B., Nursbaum, K. M., & Marmor, A. K. (1996). Comorbidity and outcome in eating disorders. *Psychiatric Clinics of North America*, 19, 843-859.

北村陽英，藤本淳三，井上洋一．(1985)．痩せを伴う Eating disorder の臨床的研究―22 年間の 216 症例について．精神医学，27，107-116.

McFarlane, T., McCabe, R .E., Jarry, J., Olmsted, M. P., & Polivy, J. (2001). Weight-related and shape-related self-evaluation in eating-disordered and non- eating-disordered women. *International Journal of Eating Disorders*, 29, 328-335.

永田利彦，切池信夫，松永寿人，池谷俊哉，吉田充孝，山上榮．(1994)．摂食障害患者における Eating Disorder Inventory（EDI）の試み．臨床精神医学，23，897-903.

仁平義明．(2000)．容貌受容度の作成．東北心理学研究，50，4.

大類純子，仁平義明．(投稿中)．摂食障害傾向女子高校生の日常生活および身体に関する評価.

Rosenberg, M. (1965). *Society and the Adolescent Self-Image*. New Jersey: Princeton Univ. Press.

（受稿：2007 年 2 月 2 日　受理：2007 年 3 月 28 日）